
水鏡の姫

一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水鏡の姫

【Nコード】

N4460Y

【作者名】

一

【あらすじ】

初投稿。

希望のない少年と希望をあきらめない女のお話。

2つの国の戦争を回避するために、王女の心が封印された水晶を探しに2人は旅に出た。

童話らしくない童話です。

前編

みなみなさま、お聞きくださいませ。

これから人間のルールを学びに行く猿のおぼっちゃまも、歌い手を夢見るヒキガエルのお嬢様も、

はたまた働き過ぎてくたびれたギリギリスの旦那さまも、どんなに着飾っても満たされないカラスのご婦人がたも！

足を止めて、お聞きあそばせ。

わたくしの名は、さじと申します。

この世で最も愚かな、道化でございます！

そう、この世で最も愚かで、最も己の分をわきまえている者でございます。

これから話すは、過去に心囚われた少年と、未来にがんじがらめにされた女の物語。

この物語の舞台は遠い昔、我らのご先祖様が『海はどこへでも繋がっており、その先に自分達の知らない大陸が広がっている』など露知らず、海の果てには世界の終わりと本気で信じていた時代のこと。

わたくしたちの住む大陸の最果てにある、風の国という小国が大陸で一等勢いのある水の国に宣戦布告をされ、戦争が始まるうかという不穏な空気が民の心をむしばみ始めたときのことでございます。ささ、どうぞどうぞ氣を楽になさってお聞き下さいませ！

蟲惑的な青白い光を放つ月明かりは、冷え冷えとした地下牢の天窓をくぐって、柔らかに少年の輪郭を照らし出す。

粗末な麻の服を一枚まとった少年は、石畳にほんの慰み程度に敷かれた藁に座り込み、壁に背を預けてぼんやりと空を見ていた。

年は15、6歳といったところ。まだ大人になるには少し早い。両の手首は枷がはめられ、足枷にも鉛でできた赤ん坊の頭ほどもあるおもりがつけられ、ただでさえ細身の体であるというのに、なぜ世の中をまだ知らない子どもがこのような目に会うのかと、見る者の痛々しさを増幅させていた。

腰まで垂らした黒髪は真っすぐでとても美しく、囚人には不釣り合いなほどつややかだった。

そんな美しい髪を持ち主であっても、性別を間違いないのは、彼の放つ鋭利なオーラのせいだろう。

目鼻立ちもくっきりとした美少年の瞳は、ただその美貌を背負うのにふさわしくないまでに生気が失われていた。

この謎の美少年は、俗人の立ち入りを禁じられている魔の森にいるところを風の国の兵に見つかり、捕まったのだと言う。

一体何者なのか誰もわからず、また本人も口を開かないために看守たちの間では、この美少年に対する憶測――（どこそこの貴族の落胤であるとか、人の形をした魔物であるなど）がいくつも飛び交っていた。

この美少年が牢獄に入れられてから、6度目の満月を迎えたある日のこと。

雑居房の粗忽な住人の声も届かぬ、静かに隔離された牢獄に一人の女があらわれた。

礼儀を知らない看守ですら、なんとかおべっかを使おうとしているその女は、どう見ても一般人にはみえず、高貴な立ち振る舞いで、開け放たれた牢獄の中へつかつかと入ってきた。

白銀に近い、金色の髪を束ねた女は身軽な軽装に茶っぽいマントをはおった旅人のような格好であったが、しかし腰には穏やかでないひとふりの剣を佩^{うぐいす}いていた。

意志の強ような光を湛えた鶯色の瞳は、美少年の仄暗い黒い瞳の奥にある心の中まで見透かすように鋭かった。

「お前、私と一緒にいてきなさい。一度捨てた『人としての尊厳』を取り返しに行くのです」

張りのあるけれども、どこか優しさを含んだその声で一方的にそう言い放つと、女は腰の剣を抜いて少年の足枷とおもりを繋ぐ鎖の一つの輪の中に剣先をつきつけ、懇親の力で剣先を輪の中にねじ込み、鎖を断ち切った。

「水の国の姫の心を奪った魔の水晶を取り戻しに行くのです」

それが、禁忌の森に臆することなく踏み行った女の目的だった。重々しい鎖から解放された少年は、別室で旅の身支度を整えさせられた。

ぼろぼろだった囚人服から、まともな旅のいでたちに着替えさせられ、端正な姿を現わした。

くすんだ原石が磨きあげられて、素人の目にも本当の価値を思い知らせることができそうなほどにりりしい少年だった。

ただひとつ、生気を失った瞳を除いてだが。

少年をこぎれいにして満足げな女は夜が明けるのを待ち、牢獄から解放されて喜びも嫌がりもしない無感動な少年を連れて、魔の森の中へと踏み込んだ。

牢獄があった要塞を出てから一日中歩き通しだったが、日も暮れたところで魔の森の中で野宿をすることになった。

無関心、無頓着な少年は女の言われるがままについてきたが、ここにきて初めて口を開いた。

「なぜ、こんな森に僕を連れてきたんですか」

女は少年が初めて口を開いたことに驚いたが、先に述べた目的の詳細を少年に語った。

「風の国は痩せた土地ながら、根気強い農牧民のおかげでほそぼそと生活しています。わたくしたちは毎日の恵みを与えてくれる自然に感謝し、多くを望まない国です。しかし、隣にある水の国が因縁

を吹っ掛けて戦争を仕掛けようとしているのです」

ここまで話して女は少年の反応を待ったが、疑問を投げかけた本人はうんともすんとも言わず、だまっているばかりだった。

中途半端に話を切るのも釈然としないので、女は最後まで話を続けることにした。

「水の国の王には、たった一人の娘がいます。その王女が愚かにも好奇心で魔の森に立ち入ったさい、心を抜き取られてしまったのです。心を抜き取られた王女は、まるであなたのように感情も関心もなにもないただの人形のようになってしまわれた」

ただ押し黙って聞いているだけの少年に嫌みのつもりで言ったようだったが、少年はじろりと女の方を見たが、またつと視線を向かない空間へ放り出した。

「水の国の王は大層悲しみ、三日三晩城の奥でふさぎ込み続け、泣き明かした4日目の朝に王女の心が抜き取られたのは私たち風の国の陰謀だと決めつけて、戦線布告をしたのです」

そこまで言うと、女から怒りが滲みでてきた。ふるふると肩を震わせて、女は続きを述べた。

「とんでもない言いがかりです。王女の心を奪い、王の怒りを買ったところで私たちに何の得があるというのです？ 憔悴した王の国を攻め立てる軍備など、風の国にはこれっぽっちもありはしないというのに……！」

込められた感情の力によって、声が大きくなっていた。

ここまでできてようやく、少年は動きを示した。

まずは、人差し指を立てて口元にやり「静かに」と女に注意を促した。

「目的を果たす前に、森に住む魔物に食われてしまいますよ。心を落ち着かせてはいかがですか？」

少年に指摘され、女は頬を朱に染めたが正論であることに間違いないので、女は握ったこぶしをゆっくりとほごいた。

「それで、風の国の王女であるあなたが、水の国の王女の心をもとに戻そうと危険を承知でここまでできたというのですか」

年相応に見えない、落ち着いた声で少年は言った。

女はぎよつとして少年を見たが、少年は涼しげな顔をして、正体を見破ったからくりを説明した。

「鎖を断ち切った剣の柄つかに、風の王家の紋章がありました。王家以外にあの紋章を持つことはゆるされないのでしょうか？」

女は居心地の悪そうに腕をくんだり、目線を逸らしたりしていたが、ひとつの嘆息をつき、しぶしぶと話した。

「あなたの言う通りです。私は自分の国を守る為に、ここに来ました。風の国の潔白を証明するために、人の心を絡め取る水晶の存在を証明するために……！」

今度は感情はこもっていても、声量は抑えられていた。

「なぜ、そこまでするんですか？あなたが」

「国を守りたいから。王家に連なる私には、その義務があるのです」少年は心底冷めた目で、女を見た。

「僕には理解できません。あなた一人で成し遂げればいいでしょう？僕の力はいらないはずです」

今まで無感情だった少年に差した、初めての感情は軽蔑だった。

「そうはいきません。お前にも協力してもらわなければならないのです。王女の心が奪われたのと同じくして、魔の森にあらわれたお前なら、何かを知っているはず。だから私は、わざわざ牢に繋がれたお前を連れ出したのです」

そういうなり、女は少年の手をつかんだ。

「何かを知っているはずのお前の力が、私には必要なのです。」

女は切迫した眼差しで、少年の瞳を真っすぐ射抜いた。

射抜かれた少年はバツが悪そうに目線を逸らすとぽそりとつぶやいた。

「きつと、みつからない。みつかりっこないんだ」

女は顔をしかめたが、さっと平常心を取り戻したかのような振る舞いで、腰に下げた皮袋から大人の手の指の先から手首までの長さを二つ分並べたような長さの木の小箱を取り出した。

落ち着いたこげ茶色の小箱は、角という角がまあるく削り取られ、植物のツタが絡み合う装飾が施された、シンプルながらも品のある物だった。

少年はその小箱を見るなり、動揺が隠せなかったようで、顔色が変わった。

「この小箱が欲しかったら、私に協力なさい。水の国の誤解が解けたら、お前に返してやります」

「脅しのつもり？」

「もちろん。私にはもう後がないのです」

少年はとても困惑した表情を浮かべた。

「その箱の中身は僕にとって、とても大事なものだ。でも僕はあなたの望みは叶えられない。叶うものではないから」

「それはどういう意味？」

不穏な空気が流れたのを二人は感じ取り、女は話すのを中断した。近くはないが遠くもない物陰から、獣の気配がしたのだ。

それは四足で地を歩き、とても大きい陰を持っていたので、距離を置いている二人の人間を戦慄させるには十分だった。

「森の番人か……」

女が低い声で囁いた。

「ねえ、その小箱を渡して？ そうしたら、僕はこの状況を打破してあげるよ」

「だめだ、私の願いを聞き入れてもらうまでは……」

「そんなことを言ってる場合じゃないんじゃないの？」

二人がもめている間に、獣はじわりじわりと距離を詰め、詳細が視認できるほどまで来た。

どうやら、人を二人はまる呑みできそうなほどに大きい銀狼のよ

うである。

「お前はここから離れていなさい」

「そんな細身のあなたが戦うつもり？」

「一応、奥の手はもっています」

「僕、逃げたら帰ってこないかもしれないよ？」

「この箱は大事なもののなのでしょう？なら、あなたは私の前から消え失せることができないのは知っています」

「大人のそういうところ、僕は嫌いだよ」

少年は言い捨てると、走り出して姿が見えなくなった。

中編

女は剣を抜き、焚火をはさんで銀狼と対峙した。

「きなさい！」

女の気迫あふれるその一言にのせられたのか、銀狼は一気に間合いをつめるために駆け出した。

焚火の目前にまでさしかかったとき、女は剣の柄の紋章をひと撫ですると意志の強い声で呪文を唱えた。

「炎よ爆ぜよ！彼の者を灼熱で絡め取れ！」

銀狼が焚火の上を飛び跳ねて越えようとした時、ちろちろと燃える程度だった炎が急に燃え上がり、銀狼の美しい毛並みを焼いた。

「きゃうん！」

と情けなく鳴いて、女から距離を置く方向に進行を変え、炎から遠ざかったが、焦げた毛並みは狼がひと唸りすると、薄緑色の光を放ち、またもとに戻ってしまった。

「獣でも、治癒魔法が使えるのか……！」

狼は執念に燃えた瞳を女にむけ、大きく飛び跳ねて女に向かった。女は剣をとっさに構えて、迎えうち鋭い爪を何とか受け流した。刃物を持つやっかいな人間と認識した銀狼は、遠巻きに女の周りを練り歩き始めた。

どうやってしとめようか、様子をうかがいつつ考えているようだった。

「さっきのが奥の手なの？」

逃げたと思われた少年の声がし、物陰から少年が近づいてきた。

「こんな危ない目に会ってまで、あなたは水晶を探すのか」

「守るべき民なくして、王家はありません」

かたくなな女の態度に最初の方こそ呆れていた少年だったが、や

がて何かを思い立ったかのように女に手を差し出した。

「その箱を渡して」

「だめだ、これは最後の切り札に…」

「使命を果たす前に死にたいの？ 大切なもの、守りたいんでしょ？」

「くっ…」

女はしぶしぶと小箱を少年の方へと投げやった。

「ありがとう」

少年は小箱を手にとると満足そうに小箱をほおずりして、物陰に引っ込んだまま見えなくなった。

銀狼は先ほどの復讐を果たすことが使命とでもいうように、非武装の少年には目もくれず、女のみを視界にとらえながら、うろうろしていたが頭の中で勝算でもついたのか、ふと足をとめた。

低くうなり、銀狼は飛びかかった。

銀狼の牙をなんとか剣で防ぎながらも、女は銀狼に押し倒されてもみ合いになった。

剣を挟んで、何とか押し返そうとする女と、食らいつこうとする銀狼。

死に直面しながら、女はふと考えた。「あの少年は小箱を手にして、遠くまで逃げてしまったのだろうか」と。

突然、暗い森には不似合いなフルートの音が聞こえた。

「？」

銀狼の攻撃の牙は緩められ、急におとなしくなった犬のように、すぐすと森の奥へ帰っていった。

銀狼が見えなくなると、フルートの音は止み、入れちがいに少年があらわれた。

「これは僕を信じてくれたお礼だよ」

そう告げると、少年は手にしていたフルートを分解して、大事そ

うに小箱に収めてふたを閉じた。

「獣^{けもの}どもの心を静める魔笛か…」

「どんなに貴重な笛なのか、僕は知らないけど、とても大事な人からもらったんだ」

と、大事そうに小箱をさすった。

「あなたの決意がそれほどまでに堅いものなら、連れて行ってあげる。でも、真実を知った先のあなたの面倒まではみてあげられないからね」

「では、水晶のもとまで…」

「いいよ。でも、いつまでも僕をお前呼ばわりする人と一緒に行動するのは、ごめんだね。だから、僕の名前はペトロと呼んでおくれよ。僕も、あなたのことを名前で呼ぶから」

「こっちだよ、リズ」

ペトロに連れられ、女は森の中心にある湖のほとりまでやってきた。

湖はとても大きく、まるで海のようにどこまでも水面広がっていて、向こう岸が見えなかった。

ほとりにはボロイ小屋が建っていた。

「森に人が住んでいるなど、初耳だぞ」

「ここまで生きてたどり着いた人間なんて、そうそういないからね。ましてや、この小屋を見たあとに生きて森の外を出られた人間の数なんて、そうそう多いものじゃないのさ」

小屋には一人のくたびれた老人が住んでいて、ペトロとリズを暖かく迎えてくれた。

そしてペトロの話を聞くと、一艘^{いっそう}しかない小舟を惜しみもなく貸し出してくれた。

「あなたの失せモノが見つかりますように」

老人は神妙な顔をして、湖の中心へときぎ出す二人を見送ってくれた。

しばらく漕いだところで、ペトロは小舟があまりゆれないように立ち上がると、フルートを取り出して、また不思議なメロディーを吹き始めた。

すると小舟の前の水面がぶくぶくと沸き立ち始めて、やがて大きな気泡が生まれては弾け、生まれては弾けを繰り返しつつも、だんだんと盛り上がって美しい女の形をなした。

水が織りなしたそのあまりの美しさに、リズは茫然としていたが、少年に促されてやっと声をかけることが出来た。

「水の精よ、初めてお目にかかります。私の名前はリズと申しまゝ……」

挨拶をしかけて、様子がおかしいことにリズは気づき、言葉を止めた。

水の彫刻は最初こそ女の形をなしていたが、やがてまた形を変え、シンプルな台座の上にリングと同じ大きさの薄いピンク色をした水晶を鎮座させた。

「これが、水晶？」

「水の精は、この水晶を水の国の王女に届けることを望んでいるってさ」

「あなたは水の精の意志が分かるの？」

「なんとなくだけどね。さ、帰ろう。気まぐれな水の精の気持ちが変わらないうちに」

水晶玉を回収し、湖のほとりまで帰ってくるなり、リズは改めて水の精が渡してくれた宝を見てハッとした。

「この水晶には、心がやどっていない！」

ヒステリックに叫んだリズを、ペトロはたしなめた。

「あまりこの森で大きな声を出さない方がいいよ。そう。この水晶には王女様の心なんかやどっていい。でも、この水晶が偽物ってわけじゃないのさ」

「なぜ？王女の心がやどっていないのに？」

「王女は別に心を水晶に取られたわけじゃないのさ」
「？」

「そもそも、水の国に王女なんていない。だって、王様にいるのは一人息子一人だもの」

「どういうこと？」

「僕は水の国の王様の一人息子だったんだよ」

ペトロの話の顛末はこういうことだった。

水の国には、水の国の危機が迫った時、優れた女王がたち、民をまとめ上げて危機を救う伝承が信じられているという。

ここ数十年、水の国では天災による不作続きと近隣諸国との戦争のせいで、国が大きく傾いていった。

王はどうにも立ちいかなくなり始めたこの国を救うのは、女王が立つしかないと伝承を盲目的に頼り始めたのだった。

そうして、生まれた一人息子を王女のように育てあげ、女王として立たせようと目論んだ。

「小さいうちなら、性別なんてどうとでも偽れるさ。だから僕は王女として育てあげられた。でも、年を取るにつれて、僕の身体はだんだんと男になっていった。そんな僕を王は城から追い出した。入れちがいに、大臣だ連れてきた昔の僕にそっくりな幼い子供を自分の娘だと思って、かわいがっているのさ」

暗い顔をして聞いていたリズに、ペトロは哀しく微笑んだ。

「僕は運命を呪ったよ。だって、どんなに努力したって女らしく振るまえても、本物の女にはなれない。救国の女王にもなれず、父親にも民にも必要とされないんだ」

「女に生れなかったからと言って、あなたはすべてを失ったわけじ

やないです。伝承に頼らなくても、女王にならなくても、国を思う気持ちがあれば国は救えるはず。あなたの父上ともう一度話す価値はあるのではないですか」

「僕が声変わりをしたとき、父様は卒倒した。そして、僕が声の病気にかかったと思いこんで、医者にかかりつきりにさせて、僕にしゃべることを禁じたんだ。そこまでする親が、僕を息子だと認めてくれるのかな？」

リズは言葉を失った。確かに、1年前に水の国の王女の心が失われる少し前に王女がのどの病気にかかったと水の国とその周辺諸国で話題が持ちきりになったことがあった。

しかしまさか、王女が声変わりをしたなどという真実を察することが出来た民など、いようはずがなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4460y/>

水鏡の姫

2011年11月12日03時10分発行